

ヤエヤマヒルギ、ススキノキの導入について 磯部実，世羅徹哉，田中真二，柴田昌男

1990年に開催された大阪国際花と緑の博覧会に出品・展示されたヤエヤマヒルギとススキノキを同年10月、博覧会終了後譲り受けたので、記録する。

1. ヤエヤマヒルギ

Rhizophora mucronata (ヒルギ科)

このヤエヤマヒルギは、近年熱帯圏で急激に減少しつつあるマングローブ林の保護保全の必要性を一般に訴えるため、国際協力事業団が、(社)沖縄国際マングローブ協会の育成した株を譲り受けて花博に展示したものである。花博終了後、国際協力事業団より、2植栽柵のうち1柵(樹高3m, 17本植栽)が本園に、残りの1柵が京都府立植物園に分譲された。

植え柵は、縦×横×高さ=2000×1750×800mmの大きさで、鋼板・アクリル樹脂板貼付製で植え土と植物ともで約5tの重量があり、大型トレーラーにより花博会場より運搬されてきたものを、フォークリフトとレッカー車により大温室中央部分の丸池に搬入・設置した。

搬入・設置時の室温は17~25℃で、植え柵内の水温は15℃、pHは6.6であった。

約10日後樹勢がおとろえ、日照不足が考えられたので、100ワットの投光機8台と500ワットの投光機4台を設置し、補光を行った。10月下旬からは植え柵内の水温を約20℃に保った。さらに植え柵内の水質は炭酸カルシウムを追加し



ヤエヤマヒルギ

たり、井戸水を補給することにより、pHを6.6に保った。

1年経過後、植え柵内のヤエヤマヒルギは、7本が新芽を次々に展開し、順調に生育している(写真参照)。

2. ススキノキ

Xanthorrhoea preissii (ユリ科)

大阪市より、オーストラリア館に展示されていたススキノキ2本の寄贈を受けた。それぞれの大きさは樹高130cm, 胸高幹回り73cm, 一方は樹高110cm, 胸高幹回り68cmであった。花博会場からの到着時には、ススキノキの植え込み用土は取り除かれており、根は相当量減少していたので幹をコモで巻いた。

2株とも直径50cmのFRP製の鉢に植えた。植え込み用土は一方は赤玉土(中粒)とボラ土(中粒)の等量混合土、もう一方はボラ土(小粒)単用にした。2株とも最低温度15℃のガラス温室で管理し、夏場は約50%の遮光をした。水は用土の表面が乾いたら与え、肥料は施さなかった。

翌春にはコモを取り除き、新葉の展開がみられたので展開の良い株をサボテン温室に展示した。

1991年12月に栽培温室にそのまま管理していた株は、花茎を抽出し始め、翌年1月には開花をした。花茎は長さ80cmで、中部より小さな花を先端までつけ、徐々に開花した(写真参照)。しかし導入約1年経過後も、地表面近くには、新根の発生が見られず、今後の生育が懸念される。



ススキノキ